誰もが結果を急ぎ、
効率が優先される今の時代に、
信念と勇気を持って、
「本物」にこだわり続けた
二百八日間。

体感温度氷点下40度。
標高3000mの
撮影地点で
フィルムに
焼き付けられた
この映画もまた、
仕事に誇りを持って
真摯に取組んだ人々の
魂の記録である。

劒岳 点の記

つるぎだけ

柴崎芳太郎 浅野忠信
宇治長次郎 香川照之
生田信 松田龍平
柴崎葉津よ 宮崎あおい
小島烏水 仲村トオル
玉井要人 小澤征悦
佐伯永丸 井川比佐志
矢口誠一郎 國村隼
行者 夏八木勲
古田盛作 役所広司

原作／新田次郎 『劒岳 点の記』（文春文庫刊）
製作／坂上順 『劒岳 点の記』製作委員会
亀山千広 東映
木村大作 フジテレビジョン
脚本／菊池淳夫 住友商事
笹村敏正 東映ビデオ
配給／東映 朝日新聞社
北日本新聞社

監督／木村大作

日本の心が
ここにある。

2009年6月20日(土) 全国ロードショー www.tsurugidake.jp

©2009『劒岳 点の記』製作委員会

誰かが行かねば、道はできない。

日本地図完成のために命を賭けた男たちの記録（トゥルーストーリー）

【物語】 陸軍参謀本部 陸地測量部の測量手、柴崎芳太郎は日本地図最後の空白地点を埋めるため、「陸軍の威信にかけて、剱岳の初登頂と測量を果たせ」という命令を受ける。前任者である古田盛作のアドバイス、新妻・葉津よの励ましを受けて富山に向かった柴崎は、案内人の宇治長次郎と合流、調査の為に山に入ったが、謎めいた行者の言葉（「雪を背負って登り、雪を背負って降りよ」）以外、登頂への手掛かりすら掴めずに下山する。そして翌明治40年、測量本番の登山。柴崎・宇治に、測夫の生田信らを加えた総勢7人で、池平山・雄山・奥大日岳・薬師岳・別山など周辺の山々の頂に三角点を設置し、いよいよ挑むは、剱岳。

しかし、剱岳山頂までの道のりは、想像を絶していた。ガレキだらけの切り立った尾根、雪崩や暴風雨など困難に続く困難が測量隊の行く手を阻む。頂上までの登頂路すら、見つけられず、そそり立つ頂を仰ぎ見るばかりの日々。重さ100キロ超の三角点用の石柱と測量器具を担ぎ、粗末な装備で挑むにはあまりに絶望的な状況に、自分たちは本当に剱岳を登り切ることができるのか、命を危険にさらしてまで剱岳を測量する意味はあるのかという迷いが、7人の胸中をよぎる。

一方、創立間もない日本山岳会も、小島烏水らが最新の登山用具を揃え、剱岳登頂を目指していた。今一度、皆に仲間としての結束を訴える柴崎。

果たして、柴崎たちは、無事に剱岳頂上に到達し、地図作りの任務を終えて下山できるのか…。

剱岳（つるぎだけ）

富山県・飛騨山脈（北アルプス）の立山連峰にある標高2999mの山。弘法大師が、草鞋三千足を使っても登頂できなかったといわれている難所。有史以来、立山修験の対象とされ、雄山神社の神である天手力雄神（太刀尾天神剱岳神・本地不動明王）として信仰されてきた。

点の記

点の記とは、三角点設定の記録である。等三角点の記、二等三角点の記、三頭三角点の記の三種類がある。三角点標石埋定の年月日及び人名、規標（測量用やぐら）建設の年月日及び人名の他、その三角点にいたる道順、人夫賃、宿泊設備、飲料水などの必要事項を集録したものであり、明治21年以来の記録は永久保存資料として国土地理院に保管されている。

なお、一般的に点の記というと三角点についての記録であるが、多角点、水準点、磁気点などの測量標にも点の記が残されている。（原作より）

こんな時代だからこそ、挑むべき「真実の物語」「本物の映画」がある。

明治40年（1907年）、古来よりその険しさから「針の山」、宗教上の理由から登ってはならない「死の山」と云われてきた前人未到の山・剱岳に、不屈の闘志、献身の心、仲間の絆を信じて挑んだ男たがいた――。

原作は『八甲田山 死の彷徨』『富士山頂』『武田信玄』などで知られる、新田次郎の同名小説。「日本地図完成」という使命を果たす為、険しい山中27箇所に三角点を設置した明治人の高潔な生き様を記した新田文学の白眉である。監督・撮影を手掛けるのは、木村大作。

この作品に"いま、失われつつある日本人の持つべき魂の姿がある"と思いを募らせ、『八甲田山』『駅 STATION』『火宅の人』『鉄道員（ぽっぽや）』など数多くの作品で、日本人の心と自然を撮り続けてきたキャメラマン・木村大作にとって、50年の映画人生全てをかけて取り組む、初めての監督作品となる。

出演者は、測量手・柴崎芳太郎に浅野忠信、案内人・宇治長次郎に香川照之、測夫・生田信に松田龍平、柴崎の妻・葉津よに宮崎あおい、日本山岳会・小島烏水に仲村トオル、元測量手・古田盛作に役所広司ら、スクリーンで圧倒的な存在感と演技力を発揮し、日本のみならず世界で活躍するキャストがそろった。

撮影は四季折々の、ひれ伏すほどの美しくも厳しい大自然、そこに挑む人間の儚き姿をフィルムに焼き付けるために、延べ200日以上を費やし、標高3000メートルを超え、最低体感温度が氷点下40度超の剱岳・立山連峰各所でのロケーションを敢行。100年前に実際に測量隊が登り、三角点を設置した山々を忠実に登っての撮影という徹底したリアリズムを追求、時に"天幕（テント）生活"も交えながらのロケとなった。

木村監督自ら「これは撮影ではない。"行"である」と称する、前人未到のスケールで製作された『剱岳 点の記』。最高の映画キャスト・スタッフの力が結集してのみ達しうる"奇跡の映画"が、ここに誕生する――。

決して名誉のためでもなく、利のためでもない。仕事に誇りをもって挑む男たち。いま、わたしたちが失くしつつある、日本人の心の物語である。

監督 撮影 **木村大作**

1939年生まれ。1958年にカメラ助手として映画界に入り、1973年「野獣狩り」で撮影監督に。代表作は『八甲田山』『復活の日』『居酒屋兆治』『華の乱』『あ・うん』『誘拐』『ホタル』『赤い月』『憑神』など。